
特別Aクラスー

空井美保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特別Aクラスー

【Nコード】

N7843X

【作者名】

空井美保

【あらすじ】

不良生徒などが多く集まる和歌倉中学校。

その中でも、一番不良生徒が多いクラス

3年A組。

人気のないクラスで

しかもクラス替えも1年の時からない状態。

転校生もA組を選ぶことなど絶対にはずだったが

そのクラスに2人の転校生がやってきた。

その名前は 知念侑李と有岡大貴。

彼らはケンカ上等。そして頭が良い。
彼らがやってきた目的とは？
これから生徒の未来が変わってゆく。

和歌倉中学校に謎の転校生（前書き）

このお話はジャーニーズ事務所および

NEWS、関ジャニ、KAT-TUN、Hey! Say! JUMP、
P、Kiss・My・Ft2、SEXY ZONEの

グループメンバーの名前が使われています。

性格、言葉遣いは 実在するメンバーとは違う部分がたくさんありますが

このお話はフィクションです。

和歌倉中学校に謎の転校生

僕たちがこの中学校にやってきたのは、理由がある。それは、乱れたクラスを直すため、しっかりとしたクラスにさせるため。

ケンカをして補導された人、不登校な人たちが集まるクラス、3年Aクラス。

僕は知念侑李、そして親友の有岡大貴。

有岡と出会ったのは小学5年生の時。

弱弱しくて、人見知りだった僕と仲良くしてくれたのは有岡ただ一人。

そして6年、中1、中2とクラスは運よく一緒だった。

見た目によらず、ケンカは上等。

有岡は弱いけど、2人で支えながら、目的を果たすことを決意した。

校舎前

知念「よし！行くか」

有岡「真剣な表情」

そしてクラスに入り・・・

先生「今日から一緒に学校生活を送ることになった、知念くんと有岡くんです。」

有岡&知念よろしくおねがいします。」

先生「左の一番端っこの2つの机、並べておいたから、右に知念、左に有岡、分かったか？」

有岡「はい！」

高木「ならむけど、知念と有岡は気付いていない」

田中「立ち上がり、廊下に出て、歩いて行く」

勉強は終わり、中休み。

しつかりした人ももちろんクラスにいる。
そのしつかりした人たちを話していた。

有岡「えっ??なんでここに転校してきた??」

八乙女「だつてさぁ・・・ねえ?」

手越「ここ、評判悪い学校だし。」

有岡「そんなの、関係ないじゃん。」

北山「それに、3年Aクラスに希望してまで入ったって事はなんか目的でもあるの?」

有岡「なっないよ?それに有岡って苗字だからAの方がいいかな?つてさ」

全員「それだけ??」 笑いが溢れる

有岡「そういえば・・・知念どこだ??」

北山「さつき、屋上のところで見かけたけど、行ってみたら?」
有岡「ありがとう。」

そして屋上に向かうと・・・

知念「じつと景色を眺める」

有岡「ココ綺麗だよ、こつこつ景色つてさ気持ちいいくなるんだ。
リラックスできるしね」

知念「そういうことじゃない。眺めているわけじゃない、考えてるんだ。」

有岡「考えてるって?」

知念「有岡は全然分かってないね。僕たちがここに来たのは、生徒を元のように戻すためだよ?」

有岡「そうだけど・・・」

知念「僕ってさ、見かけはニコニコしてるキャラだけど、心の中ではちゃんと目的に沿ってるから」

有岡「へえ・・・。でも、まずはクラスに行こう??みんな待ってるよ?」

知念「そうだね・・・」

最近の知念はなんか変だ。

ニコニコの笑顔にも裏がある。

前の知念は、裏表のない、いつも笑顔だったのに

今は知念というオーラが消えた。

教室で・・・

知念「そのばらばらの席の人たちってさ、どういう人?」

藪「えつと、ケンカしたり、不良生徒って感じかな?」

知念「いつから?」

藪「高校1年の時からずっとだよ?だから、このクラスのクラス替えは一度もないんだ。」

八乙女「まあ、クラス替えしたとしたら、先生にも、他のクラスにも迷惑になるみたいだからね」

有岡「高木・・・田中・・・加藤・・・中島・・・?」

八乙女「ああ、このクラスには中島が2人いるんだ。裕翔と健人。」

有岡「そういえばさ・・・。右の窓寄りの席って使ってないの?」

藪「そこは山田の席だよ?不登校、ケンカ、補導の連発しているクラスーの問題生だよ!」

知念「クラスーの問題生・・・か・・・」

そこで知念の表情はグッと変わった。

何かに気付いたような、そんな気がした。

ただ知念は行動に移すことはしなかった。
なぜだろう・・・

不良チームの集まり

高木「あの転校生、どう思う。」

田中「一言で表すとうざい。」

中丸「一言って、それ以外なんだよ。」

加藤「正直弱そうだから、別に倒すほどのやつじゃなくなっ?。」

中島「じゃあ、そのまんまにしく気っすか?。」

菊地「弱いやつは、倒すの、面白そうじゃないっすか?。」

高木「だめだ。山田がいる。あいつがいる時点で、やる気でねえし。」

そうやってからかうように笑う不良チームたち。

それを影から見ていた知念。

知念「あのグループが一番手ごたえある気がする。」

有岡「えっ??山田は??。」

知念「山田は簡単だよ。あの手を使えばね。」

有岡「あの手ってなに??。」

知念「それはそのときに教えるよ。」

そのころ山田はどこかというと

学校に来ていた。

学校に来て、校舎の倉庫の中で寝ていたのだ。

それに気付いた有岡は真っ先に知念の元へ。

有岡「ねえねえ！！その倉庫で山田が・・・」

知念「今日は山田の日ではないから。別に勝手にしょ。」

知念はいつたい何者なのだろう。

目的がないと、関わらない。

普通、クラスを元のクラスにしたいのなら

乱れている生徒を優先に直していくのが普通ではないのか？

知念「今回は中島と菊地だ。」

有岡「中島健人と菊地風磨・・・か。」

知念「あの人たちは、決して頭はよくない。つまり、頭を使った問題なら、僕たちでも勝てる。」

有岡「でも・・・勉強に勝つても、よくなるの？」

知念「中島は家の問題で、離婚になるかならないかの境目。」

知念「そして菊地はお父さんとお母さんは別れていないけど別居中。そして母親と暮らしている。」

有岡「その情報どこで・・・」

知念「えっ？そのくらい知らないと、このクラスは終わっちゃおうよ？」

有岡「・・・。なんか必要なものある??用意できるものなら用意できるけど。」

知念「必要なものは何もないよ?」

今回のターゲットは中島健人と菊地風磨の2人。

2人は不良チームの下っ端的存在で

1年生までは普通のまじめな中学生だった。

だけど、転校してきた高木雄也にさそわれて不良チームの入った。

どちらとも、家庭の事情がある。

中島健人は親の離婚の境目で生活。

菊地風磨は親の離婚ではないが、別居しているためほとんど1人。

知念「中島健人、菊地風磨。」

中島「なんだ。転校生。」

菊地「俺たちを呼び出すとは生意気なやつらだ。」

有岡「びびっている。」

知念「今日はお前たちを倒しに来た。」

中島「つは??」

菊地「意味わかんねえし。倒すって・・・お前たちが??」

有岡「知念・・・」

中島「そこのお前、どうやらびびってんな?」

有岡「・・・びびってないよ・・・」

菊地「まじかよ??目をそらすってびびってるとしかいえないんですけごー」

知念「キックする。」

ついに知念は攻撃開始!!

まずは相手をキックして

相手のやる気を伺う。

中島「やる気か?」

知念「ああ。僕、負ける気なんてないから。」

知念は本気になった。

とてもきびきびした動きでキックや殴ったりを繰り返し

相手が少しくつたりしてきた時

知念「君たちの親は決して幸せではない。」

中島「・・・・・・・・・・・・・・・・」

知念「離婚、別所」

菊地「・・・・・・・・・・・・・・・・」

知念「それと、君たちがいるからだ。」

知念「有岡。」

有岡「そんな不良ぶってたら、いつになっても親からは愛されない
つてことだよ。」

知念「親不孝者って言葉があるけど、君たちにピッタリだよね。」

有岡「もう高校3年生だし、卒業できなかつたら、嫌われちゃうね
？」

中島「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この日。

少し暴力を振るってしまったが
血を出すほどではない。

その暴力を振るったあと

知念、有岡は言葉で説得した。

そして彼たちは消えていった。

次の日

高木「今日、あそこのゲーセン行こうぜ！」

田中「賛成!!」

加藤「OK!OK!」

中丸「ゲーセンだったら得意!!」

玉森「よし！金どつする？」

高木「かつあげするに決まってるだろ？」

高木「中島、菊地、かつあげしてこいよ。」

中島「俺たちさ……」

菊地「今日でこのチームから外れるから……」

田中「っは？」

中島「俺たちの親は別居してたり、離婚してたり、幸せって思うような環境にいないんだ。」

菊地「だから、こんなことしたら、もっと悲しませるだけだと思っから。」

とって中島と菊地は走って学校へ向かった。

中島と菊地は、案外親思いなのだ。

こうして知念、有岡の2人は
問題を元の彼らに替えていくのである。

時々失敗する時もあるけど

支えあつたことを彼らは忘れていない。

これから新たな生徒が元に戻って行くのであろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843x/>

特別Aクラスー

2011年10月21日10時01分発行